

## 審査員からのコメント

### 【岸本葉子さん・エッセイスト】

戦争は命や建物だけでなく、日常や希望まで奪う。昭和館の展示で学んだこのことを、昭和館のみでの体験に終わらせず、自分のいる場所に結びつけて、調べていく探究心がすばらしい。

過去を学び続けることの大切さを、作者自身の実践によって伝えている。現在の平和な光景から、直接には知り得ない、先人たちの苦難と努力の歴史を、この作品のようにして理解する試みが全国各地に広まることを願う。

### 【関沢まゆみさん・国立歴史民俗博物館教授】

新保さんは、昭和館のオーラルヒストリーで、空襲後、家に帰った時、「駅に降り立ったら全てが焼け野原」「ぽっかり穴が空いていた」という女性の証言に胸が締めつけられたといいます。

また、その女性は、困窮のため学校を中退して働くことになり、学校に行けた「学生に会うのも嫌だった」といいます。その語りに、新保さんは、戦争が生命や建物だけでなく、人間の日常の生活や希望まで奪うこと、戦争のひどさを痛感したことがわかります。

そして、自分の住む町も空襲にあった「事実」を突き付けられます。そのなかで、オーラルヒストリーで、子どもながらに親とともに働き「復興に尽くした」という男性の言葉を思い出し、当時の人びとの復興にかける強い思いがいまの「豊かな暮らしの土台」を築いたことに気づいているところがたいへん良かったと思いました。